

青森県の麻について (2)

尚綱短大 村田陽子 遠藤時子
 北海道教育大 斉藤祥子

目的 古代から我々祖先の衣生活を支えてきた最も重要な植物に麻類がある。その苧は糸や布として衣服に用いられる他に調布として貢納され古代国家の経済を支えてきた。また綱索、網、袋、畳糸、小は鼻緒に至るまで麻なくして生活は存立しなかった。明治以降、木綿の急激な普及によって麻類は衣料の王座を追われ、特に大麻は戦後、その麻薬効果が知られてからは栽培が禁止された。また日常衣服の洋装化に伴ない苧麻等の需要も激減し、特に大麻の復活はあり得ない。この麻類の終焉に当り、その利用の全貌を明らかにし記録することを目的に今回も青森県について報告する。

方法 各県毎に市町村史・誌より麻類および衣料原料に関する記述を収集、整理し、特色ある地域については実態調査を行う。

結果 青森県の麻について収集した資料中、特色ある地区について実態調査を行った。その1は三戸郡である。同郡階上町、北接する十和田市で糸績みの際、細割した繊維を膝頭の上で撚繋ぎ、ツムとテシロで撚かけしているので同郡の五戸町、新郷村、三戸町に実態を訪ねた。結果、三戸町斗内の大羽沢地区のみ指先で撚繋ぎ、糸車で撚かけをしていることが分った。南接する岩手県二戸町も同じ方法という。また五戸町、新郷村、三戸町それぞれ加熱の時間に大差があり、地区毎に種々の扱い方がされていた。その2は中津軽郡で、町史・誌等の資料がなく全く状況が不明であったが、岩木町では苧麻布にこぎん刺しをし、相馬村では古く大麻を用いて衣料用、野生の苧麻を糸・縄用とした。西目屋村でも古くは大麻を用い、現在でも自生する苧麻の糸を「みの」の編手としている。